

看護職の国際看護学に関する意識調査

— 呉および広島地域の病院に勤務する看護職の場合 —

呉大学看護学部

平 岡 敬 子 岩 本 由 美
信 岡 利 枝

論文要旨 国際看護学の講座や授業科目をもつ大学が増え、学生の意識も高揚しているが、地方の病院に勤務する看護職にとって、「国際看護学」、「国際協力」は日常の業務の中で、ほとんどかかわることのない現象である。そこで、呉、広島地域の病院に勤務する看護職の「国際看護学」に対する関心度を知る目的で意識調査をした。その結果、同地域の看護職全体から見れば、「国際看護学」への関心度はそれほど高いとは言えないが、将来、4年制の看護系大学への編入学を希望している者や、積極的に生涯教育を受けている看護職は、「国際看護学」への関心が強く、国際看護学を構成する授業科目を受講したいと考えていることがわかった。また、「国際看護学」を看護系大学の中で確立するためには、「国際看護学」の内容や看護学の中での位置づけなどを臨床の看護職、とりわけ、日常の業務の中で国際化を意識する機会の少ない地方の看護職に対して、積極的にアピールすることが今後の課題であると確認した。

キーワード：国際看護学，看護職，呉・広島地域

■ はじめに

主として、国際看護研究会のメンバーを中心に「国際看護学」の確立をめざし、研修会等の開催や看護教育カリキュラムへの「国際看護学」の導入など、さまざまな活動や努力がなされている。その結果、国際看護学の講座や授業科目をもつ大学が増え¹⁾、学生の意識も高揚している。たとえば、「国際看護学」、「国際保健医療協力」に関する学生の意識調査によると、看護学科の学生の80%から90%が国際保健医療協力に関心があり、その過半数が「国際看護学」の受講を希望しているという報告等がある²⁾。また、著者が4年制大学の看護学生177名に調査したところ、将来、開発途上国で保健医療の仕事に従事する機会があれば、77%の学生が「是非、あるいは条件次第でやってみたい」という回答を示した³⁾。

呉大学看護学部は、国際社会に対応する看護者の育成を開学の目的の一つとしている。しかし、現実的な視野に立てば、地方の病院に勤務する看

護職にとって、「国際看護学」、「国際保健医療協力」は日常の業務の中で、ほとんどかかわることのない現象である。看護学を実践の科学と位置付けるならば、臨床の看護職の問題意識の中にそれが形成されない限り、「国際看護学」の存続性は危うくなるであろう。そこで、臨床の看護職への啓蒙活動を実施する上で、まず、呉および広島地域の病院に勤務する看護職に「国際看護学」に関する意識調査を行い、彼らの「国際看護学」に対する関心度を知ることができたのでここに報告する。

■ 方 法

対象：呉および広島地域の病院に勤務する看護職
方法：自作の無記名自記式質問紙による郵送法
調査期間：2000年3月から5月まで
調査項目：1) 対象者の背景 2) 呉大学カリキュラムの中で受講を希望する授業科目の状況など
5項目

ひらおか けいこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

データ収集方法：呉および広島地域の病院を訪問し、看護部長に調査への協力を依頼した。承諾の得られた後、調査票を配布し、後日、回収あるいは返信用封筒での返送を依頼した。調査票の前文で研究目的を説明し、回答したくない場合には回答する必要のない旨を明記した。

データ分析方法：統計ソフト SPSS を使用し、比率の算出およびクロス集計、 χ^2 検定を行った。

■ 結果

呉および広島地域の病院に調査の依頼をしたところ、13カ所の病院で承諾を得た。13カ所270名に調査用紙を配布し、221名の（回収率81.9%）より回答を得た。

1. 対象の概要

対象者221名の内訳は、女性211名（95.51%）、男性10名（4.5%）で、年齢は20代が最も多く133名（59.9%）、ついで30代が58名（26.1%）であった。最終学歴は専門学校卒業者が195名（87.2%）、短期大学卒業者が23名（10.4%）であった。現在の職位は、大多数が看護婦・士（184名、83.3%）であった。在職年数は6年から10年（60名、27.0%）が最も多く、次に3年から5年（57名、25.7%）が多かった。勤務形態は、ほとんどの者（150名、67.65%）が三交代勤務であった。

2. 国際看護学を構成する授業科目の受講希望状況

本学には、「Nursing Communication」「国際

保健」「国際保健医療協力論」「国際看護方法論」「国際感染看護学」という5つの国際看護学を構成する授業科目がある。本学の授業科目の一覧表の中から、受講してみたいと思う科目を自由に選択するよう求めたところ、前述の5つの科目の受講希望状況は、図1のとおりであった。「Nursing Communication（59名、26.6%）」が最も多く、次に「国際感染看護学（44名、19.8%）」が多く、ついで「国際看護方法論（33名、14.9%）」、「国際保健（27名、12.2%）」、「国際保健医療協力論（22名、9.9%）」という順であった。また、受講したい国際看護学を構成する授業科目の数は、図2の通りであり、1科目と答えたものが48名（21.6%）、2科目が18名（8.1%）、3科目が11名（5.0%）であった。しかし、過半数の者（130名、58.6%）は、一つも受講を希望しないと答えていた。

これを年齢別に見てみると、20代よりも30代、40代の方が国際看護学に関する科目を受講したいと思う者が多い傾向にある（図3）。しかし、統計による明らかな差はなかった。また、職位に関しては、科目によっては看護婦・士よりも副婦長、婦長等の管理職の方が国際看護学を構成する科目の受講希望者が多い傾向にあったが（図4）、全体的な科目数で見ると差はなかった。勤続年齢については、勤続年数が長いほど受講希望者がやや増える傾向が見られたが（図5）、これも統計的な明らかな差はなかった。専門分野も同様に、国際看護の科目の受講希望者との間に何ら関係がなかった。

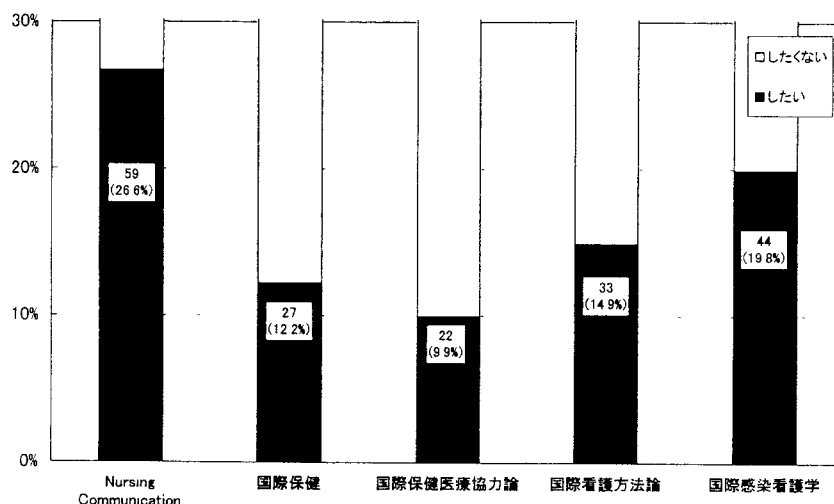


図1 受講してみたいと思う国際看護学を構成する授業科目

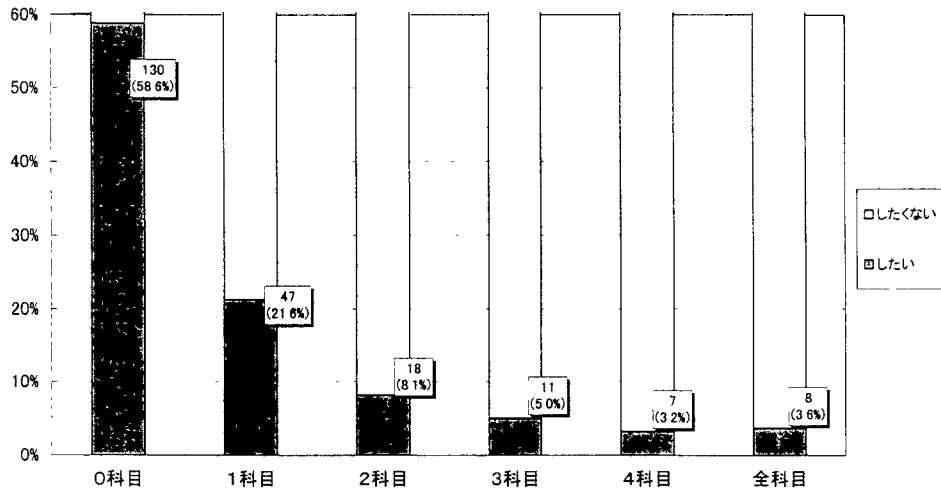


図2 受講したい国際看護学を構成する授業科目数

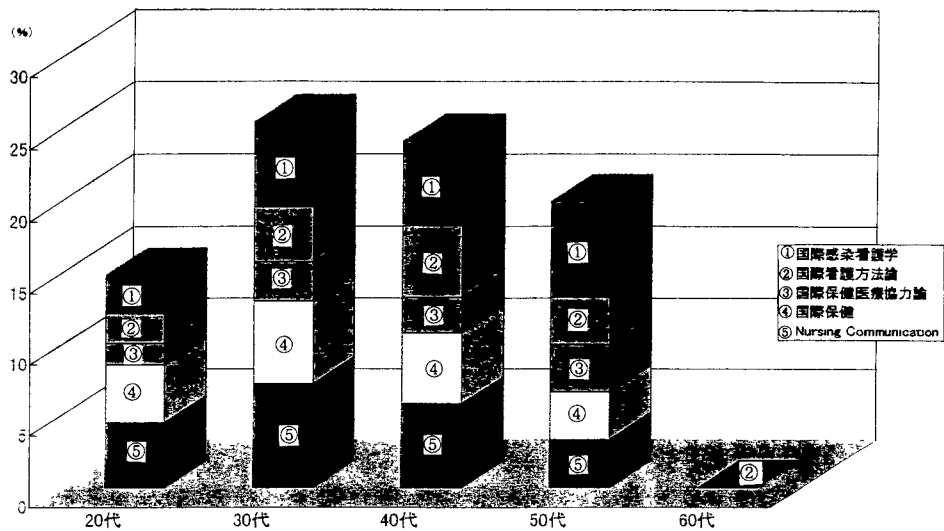


図3 年代と国際看護学の科目受講希望者数の関係

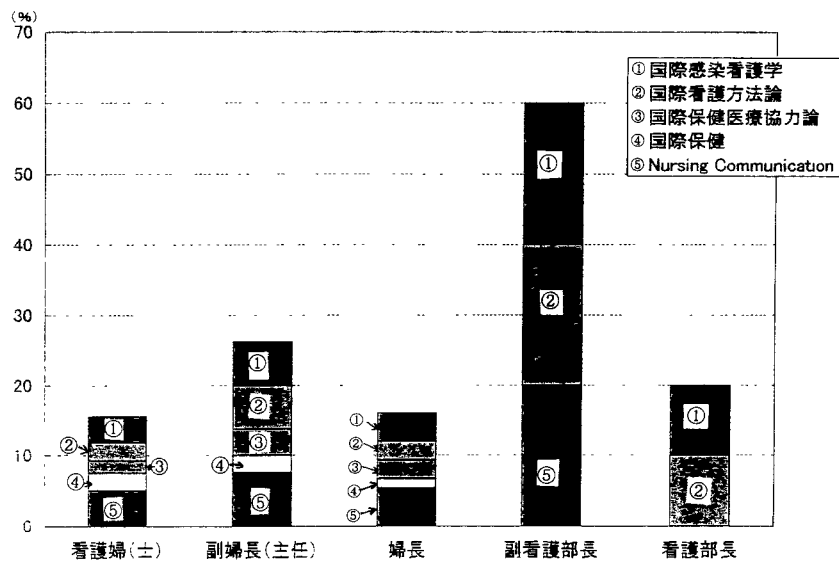


図4 職位と国際看護学の科目受講希望者数の関係

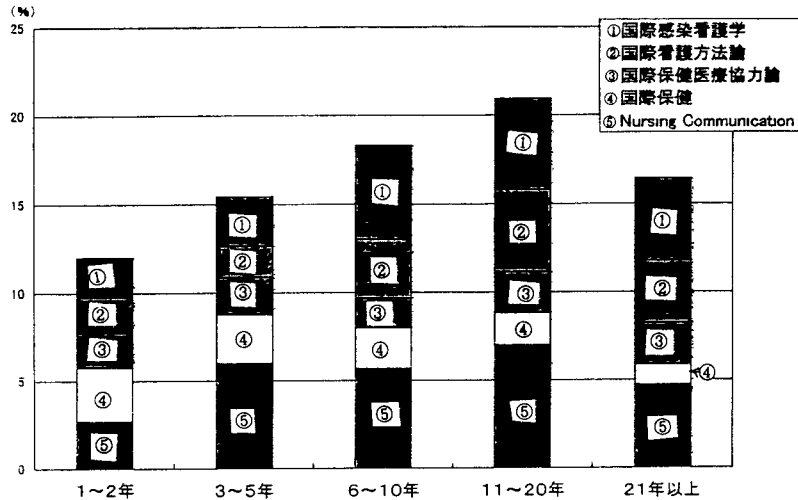


図5 勤続年数と国際看護学科目受講希望者数の関係

3. 国際看護学を構成する授業科目の受講希望者の特徴

1) 編入学希望者との関係

国際看護学を構成する授業科目の受講希望の状況を見る限り、臨床の看護職は「国際看護学」にほとんど興味がないように見えるかもしれない。しかし、ここに「国際看護学」の科目を受講したいと思っているグループがいる。それは、4年制の看護大学への編入学を希望している集団である(図6)。彼らは、編入学を希望しない集団と比べると「国際看護学」の科目を受講したいと思っている比率が大きいことが顕著である。

「Nursing Communication」を受講したいと思っている58名中34名(58.6%)は、編入学を希望している者である。同様に、「国際保健」の27名中15名(55.6%)、「国際保健医療協力論」の22名中14名(63.6%)、「国際看護方法論」の33名中

21名(63.6%)、「国際感染看護学」の44名中24名(54.5%)が編入学を希望している者たちであった。このように、国際看護学の科目を受講したいと回答した者の6割前後は、編入学を希望している者であった。看護職全体を対象とすると「国際看護学」のそれぞれの科目の受講希望者は、2割にも満たないが、編入学を希望する集団では、それがおよそ6割に達することがわかった。

さらに、「看護学をもっと勉強したい」、「広い分野の勉強がしたい」という理由から、編入学を希望した者の多くが、「国際看護学」を受講してみたいと思っている傾向がある。例えば、「Nursing Communication」で見ると、「看護学をもっと勉強したい」と思っている者の42.4%、「広い分野の勉強がしたい」と思っている者の46.3%が、「Nursing Communication」の受講を希望しており、「学士が欲しい(39.1%)」、「保健

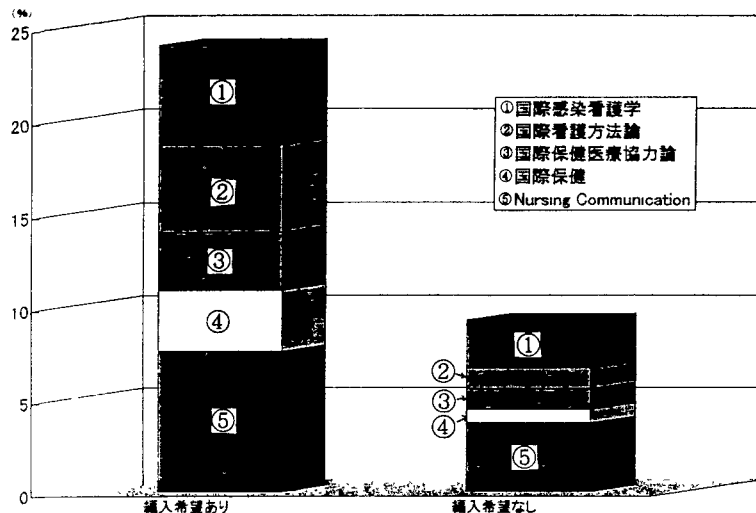


図6 編入学希望と国際看護学の科目受講希望者との関係

婦・士の資格が欲しい(28.6%)」という理由から編入学を希望している者よりも割合として多いことがわかった。

2) 生涯教育との関係

現在、実施している生涯教育との関係で見ると、看護協会の研修など、病院外での研修を受けている者は、「国際看護学」の授業科目を受講したいと思う者が多いということがわかった。生涯教育として、病院内の研修を受けている者や職場での経験を積むことで生涯教育としている者に関しては、国際看護学の科目の受講希望との間に何ら関係が見られなかったが、院外研修との関係で見ると、「Nursing Communication」を受講したいと思っている59名中44名(74.6%)は、院外研修を生涯教育として受けている者であった。同様に、「国際保健」の27名中21名(77.8%)、「国際保健医療協力論」の22名中19名(86.4%)、「国際看護方法論」の33名中26名(78.8%)、「国際感染看護学」の44名中34名(77.3%)が院外研修を受けている者であった。このように、国際看護の科目を受講したいと回答したものの7割以上は、院外研修の受講者である。また、受講を希望する国際看護の科目数が多くなるにつれて、院外研修の受講者が占める割合が多くなっていることがわかった(図7)。看護職全体の中では、「国際看護学」のそれぞれの科目の受講希望者は、ほとんど2割に満たないが、積極的に院外での研修を受けている者は、国際看護の科目の受講を希望する率が高いことがわかった。

■ 考 察

地方の病院に勤務する看護職にとって、「国際看護学」はあまり関心のある科目ではないことがわかった。国際化、国際社会といわれても、日々接する患者の大多数が日本人である現実の中で、「国際看護学」は机上の学問でしかないのかも知れない。ちなみに、彼らが受講を希望した本学の授業科目の中で、きわめて多かったものは、「ターミナルケア」、「患者心理・心身援助学」、「在宅看護」、「臨床心理学」、「コンピューターネットワーク」であった。これらは、彼らの学生時代には授業科目になく、受講できなかった科目や、日々の患者との関係の中で生まれる疑問や葛藤に答えを求める科目、あるいは現代の情報化社会の中で道具として必要とされているものであった。また、当然のことであろうが、臨床の看護職は直接、看護に関係の深いものを選択する傾向がある。国際看護の中でも「国際看護方法論」や「国際感染看護学」のように、科目の中に「看護」という文字のあるものの方がそうでないものより受講希望者が若干、多かったのは、そのような理由からであろう。

しかし、地方の病院に勤務するすべての看護職が「国際看護学」に無関心であるわけではない。編入学を希望する者は、「国際看護学」の科目を受講したいと回答している者が、過半数を超えていた。統計的な有意差こそなかったが、今後、編入学生として4年制大学の門をくぐる看護職たちの多くは、「国際看護学」への期待も高いことが予測される。彼らの多くは、「看護学をもっと学びたい」、「広い視野の勉強がしたい」と思い、

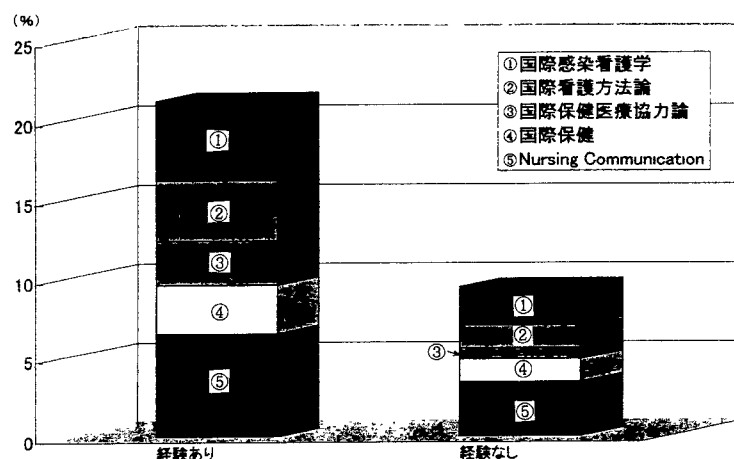


図7. 院外研修と国際看護学の科目受講希望者数との関係

編入学を希望しており、看護学をもっと広い視野でとらえようとする意味では、「国際看護学」は、彼らのニーズにあう授業科目でもある。

また、積極的に院外研修を受けている者たちも、「国際看護学」の科目の受講希望率が高く、「国際看護学」への関心が高いことが予測される。受講を希望する「国際看護学」の科目数が多くなるにつれて、院外研修の受講者が占める割合が多くなっていることから、彼らの「国際看護学」への関心を伺い知ることができる。「国際看護学」は、現在、臨床で働く看護職が学生であった頃、カリキュラムにはなかった授業科目の一つであり、生涯教育を積極的に受けようとしている看護職たちのニーズにも合う科目となり得るであろう。

■ 結 論

以上のことから、呉および広島地域という地方の看護職全体から見れば、「国際看護学」への関心度はそれほど高いとは言えないが、将来、4年制の看護系大学への編入学を希望している者や、積極的に生涯教育を受けている看護職は、「国際看護学」への関心が強く、「国際看護学」を構成する授業科目を受講したいと考えていることがわかった。

また、「国際看護学」を看護系大学の中で確立するためには、臨床の看護職への啓蒙および宣伝活動が必要であることを確認できた。とりわけ、日常の業務の中で国際化を意識する機会の少ない地方の臨床看護職には、「国際看護学」の内容や看護学の中での位置づけなどを積極的にアピールすることが、今後の課題となる。

引用・参考文献

- 1) 現在、「国際看護学」に関連する授業科目をもつ看護系大学は、2割程度である。
- 2) 高田恵子「国際保健医療協力に関する看護学生の意識調査」[第14回国際看護研究会抄録]p.27, 9.18, 1999. 吉野純子「看護学生の国際看護・国際協力に関する意識」[第14回国際看護研究会抄録] p.30, 9.18, 1999.
- 3) 平岡敬子「日本の保健医療協力における看護分野の協力の実態と課題」[看護管理]Vol.5, No.8, p.554, 1995.

英文抄録

Study on Consciousness among Nurses about International Nursing: The Case of Nurses in Kure and Hiroshima Regions

Keiko Hiraoka

Growing number of universities are providing classes or courses for International Nursing, and college students are eager to take these classes. For nurses who work a local hospital, however, the subjects such as “International nursing”, “International Cooperation” seem hardly not related to their daily practiced of clinical nursing. In these circumstances, a survey was done to find out degree of interest toward “International Nursing” among registered nurses who work in hospitals in Hiroshima and Kure area.

As a result of this survey, even though there was not such a high interest in “International Nursing” in general; it was found that for those who are willing to return school to pursue bachelor degree, or who are willing to participate in continuing educations, interest to “International Nursing” is high, and they are eager to take classes which consists “International Nursing”.

For establishment of “International Nursing” as a solid realm of nursing, it is important to advocate International Nursing to clinical nurses, especially those who do not have much opportunities to be consciously aware of internationalization in daily practice in a hospital in local area.

Key Words: International Nursing, Nurses, Kure and Hiroshima Regions